

昭和30年ころの 寒河江町並図 解 説



地方事務所前から西ノ町方面を望む

寒河江町並研究会

昭和30年ころの空から見た旧寒河江町



長岡山
グラウンド

寒高

八幡宮

駅

寒河江中学校

寒小

寒河江市役所

発刊のことば

戦後60年、未曾有の敗戦の辛酸を舐めて、激動する社会の中から立ち上がった私達は、唯生きることにのみ身命を費やし、事象の変貌を見つめ直す余裕もなく、無為に過ごさざるを得なかった過去が惜しまれてなりません。

わが郷土寒河江は、大江公の城下町として800年を越えた歴史を保持し、戦後の10年間は町並や家々の佇まいにも、余り変わりがなかったが、昭和29年8月1日に市制が施行され、10月31日佐藤繊維で温泉が自噴し、昭和30年6月13日に行われた「むつみ荘」の温泉開きを皮切りに、12軒の旅館で華々しく「寒河江温泉」が開湯するに及び、急速に町並をはじめ道路の新設と改修が進み家屋の新築・改築により、瞬く間に町全体が大きく変貌することとなりました。

平成14年4月、友人の大久保忠男君から、当時約70年前の昭和の初期から平成12年頃までの、元寒河江町役場前から八幡様までの町並を、一戸一戸実に克明にその変貌の様子を記述した冊子を頂戴した時、その明晰な記憶力と努力に驚嘆し、もう少し範囲を広げて欲しいと懇願しましたが、惜しくも、平成16年4月病に倒れ黄泉に旅立ってしまいました。

その後、市史編さん室の宇井 啓先生と大久保君の遺稿が話題になった時、昭和30年頃の寒河江町時代の町並をぜひ再現して見たいものだと言いがまとまり平成18年12月18日各町の有識者にお集まりを戴き、「町並研究会」が発足したのでした。

この会の目的は、「町並は町の顔ばかりでなく、人々の思い出であり大切な歴史でもある。今50年前の昭和30年代の町並を記録することは大変な仕事ではあるが、寒河江の歴史の解明にもつなげる」としました。旧寒河江町をおよそ10区分してそれぞれの地区の分担者を選定し、昭和30年当時の居住者名や屋号等を明記すること、更にはその地域の旧跡をはじめ、伝承されている祭・行事等についても取り上げ、言わば「町並回顧録」のようなものを作ることになりました。

この会の運営に当たりましては、極めてご多忙な宇井 啓先生には事務局を担当されまた、渡辺広志氏からは、先端技術を駆使した詳細な地図や解説資料を創作する等、献身的なご努力を重ねられ、この事業の原動力となっただきましたことに、深甚な敬意を表する次第です。

更には、各地域の資料作成を担当された方々は、この事業の性格上80歳前後のご高齢にも拘らず、ご多用の中を曲げてご協力をいただき、厚くお礼を申し上げます。

この一編の資料が町の歴史文化に関心をお持ちの市民の皆さんにとって、聊かなりともお喜び頂けますことを念じ、市当局を始め関係各位に対し改めて衷心よりお礼申し上げご挨拶といたします。

最後に本書は平成19年度 寒河江市歴史文化ふるさと回帰事業の一つに取り上げられました。ありがとうございました。

町並研究会代表 安孫子久右衛門

目次

昭和30年ころの空から見た旧寒河江町	1
発刊のことば	2
解説	4
1.旧寒河江の町並形成と変遷	
(1)室町時代の寒河江の町	
(2)江戸時代の寒河江の町	
(3)明治時代の寒河江の町	
(4)大正時代の寒河江の町	5
(5)昭和時代の寒河江の町	
(6)まとめ	
2.昭和30年ころの寒河江の町並の特徴	6
(1)山形街道 (2)天童街道 (3)谷地街道 (4)内楯、上・下西小路周辺	
(5)六十里越街道(西の町・六供町) (6)寒河江駅周辺	7
(7)新町・横町・山岸・石持周辺 (8)八幡神社周辺 (9)船橋・元町周辺	
3.寒河江のおもな祭り	8
(1)寒河江仏教会の「花まつり」について	
(2)寒河江八幡宮の祭り	9
(3)山峡巖島神社の祭り	10
(4)常林寺の仁王尊の祭り	11
(5)船橋地藏尊の祭り—付船橋共同作業所—	
(6)正覚寺不動尊	12
(7)法泉寺の竜神堂祭り	13
(8)陽春院の延命地藏尊(または将軍地藏)	14
(9)山岸毘沙門堂の祭り	15
(10)石持観音堂の祭り	16
(11)丑町宿龍院の閻魔堂十王像	17
(12)丑町滝田門観音と十カ所詣り	18
(13)細小路熊野神社祭礼	
(14)二十四町会子どもみこしの起源と今	19
(15)十日市場お大日様の祭り	
(16)金比羅・姥石様の祭り	20
(17)新宿阿弥陀堂の祭り	21
(18)七日町市神祭	
(19)越井坂と虚空蔵様	22
(20)長念寺長岡観音の祭り	23
(21)七日町熊野神社の祭り	24
(22)君田町と大木山舟着観音堂	25
(23)村社鹿島月山両所神社	26
(24)新道について	27
(25)十二小路薬師堂	28
(26)西根二渡観音	
(27)西根北町薬師堂	
(28)山形県縦断駅伝競走大会	29
協力者一覧 執筆者 あとがき	30
町並研究会委員 奥付	

解 説

1、 旧寒河江の町並形成と変遷

旧寒河江町の集落は、寒河江城と寒河江八幡宮の二つの核を中心にして発達して来た。建久三年（1192）寒河江初代領主大江親広が父広元の許可を得て、長岡山南端の丘の上に鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の分霊を迎えて寒河江八幡宮を祭ると、その付近に神社に奉仕する人々が住みついた。長岡山麓の山岸近辺も集落ができたのであろう。

寒河江小学校の所に寒河江城（楯）ができたのは、貞永元年（1232）ごろで、寒河江の領主として認められた親広による楯の構築であった。この城は一重の濠をもつ館城の形式で豪族屋敷ほどの規模であった。この城館の周囲にも家来等が住みついたものらしい。

(1) 室町時代の寒河江の町

その後大規模な町づくりが行われたのは寒河江大江氏八代時氏と九代元時の時代で、およそ50年ほどの歳月にわたるものである。

その町づくりの形態は、室町時代末期に描かれた「寒河江大江城図」で知ることができる。まず寒河江小学校の所にあった一重の濠の区画を本丸として二重・三重の濠を置いて家臣団を居住させる。いわゆる内楯である。その外側に農民等を置いて城下を形成する。二の堰の水を町に流し濠に入れ水田へ引く。城の周囲の町では市の立つ町もあった。城と八幡宮をつなぐ西方の通りは西ノ町・上町・中間町・吹払町から柴橋道へと続く。明応八年（1494）に澄江寺が建立されると新町通りが切られた。新宿も新たに切られた通りらしく南方へ祐林寺坂を経て長崎道となる。東方へは南町から越井坂を経て本楯道と新田道に分かれる。北方へは矢ノ目から七日町・君田町を経て石川道とつなぐ。内楯ばかりでなく城下にも家臣団が配置されている。八幡宮には別当の満徳院、その麓には熊野宮や神宮寺、正福院などの山伏や澄江寺・法泉寺・西運寺があり、町の中にも養殊院・福泉寺・本願寺・高林寺等が見える。城郭内には惣持寺・長念寺、七日町に宝幢寺が置かれた。

(2) 江戸時代の寒河江の町

寒河江代官所（陣屋）が西ノ町通りから突き当たった二の丸に置かれ、寒河江はこの地方の天領支配の中心地となった。「寒河江千軒」と称され、各通りには月の何日何日と日を決めて立つ「日市」が開かれた。西ノ町では1・25、上町では3・15・23、六供町では21・23、南町では5・13、七日町では7・17・27、新町では9・11と月の奇数日には寒河江の町のどこかで「市」が開かれ多くの人々が集ってきて、色々な物資が売買された。そのころ寒河江の町は「寒河江本郷六カ村」と称し、楯西村・楯北村・楯南村・君田町・石川村・本楯村を含んでいた。この本郷に25軒の造り酒屋が営まれていた。

寒河江城が破却された後も寒河江小学校の所の本丸と町内の通りはそのまま残された。南町の寒河江陣屋（今のひがし公民館）辺りを起点として東方へは南町・越井坂を経て天童街道、南方へは南町・新宿を経て山形街道、西方へは西ノ町・六供町を経て六十里街道と左沢街道、北方へは七日町・君田町・石川を経て谷地街道である。それぞれの街道には人家が立ち並び町並を形成した。

(3) 明治時代の寒河江の町

明治時代に入ると新しい道路が開削された所が三カ所ほどあった。その一つは明治14年に関山新道の開削による神町―谷地―寒河江―山形というルートの一環として七日町から小泉船場まで郡道開削である。とくに七日町と十二小路間は田野に道路を切ったので、新しく民家が移住して来て「新道」という集落を形成した。ほかに明治19年に寒河江と日田間に直線道が切られた。明治3年には六供町と米沢間に直線道が切られた。明治33年には鹿島と石持と十二小路間が直線道路になった。

ほかはまったく寒河江城時代の通りそのままであったが多くの職種の家々が立ち並び新しい町並を形成した。明治9年の西ノ町から六供町にかけて大通りには次の職種の家々があり、しだいに商店街を形成するようになる。小間物11、古着6、質屋5、べっ甲2、紺屋2、宿屋5、両替2、酒造2、絞油1、醤油3、煙草小売3、水車1、馬喰1、髪結4、料理屋2、魚仲買2、歌舞伎3、煮売10、貸座敷1とある。明治30年ころになると、かやぶき屋根や杉皮ぶき屋根に交じって土蔵造りの店舗も次々と建てられて町並みが変わっていく。それに南町には西村山郡役所・西村山郡会議事堂、西ノ町にはお菓子の家のような楯西分署（寒河江警察署の前身）、六供町には山形治安裁判所寒河江出張所、寒河江税務署の役所が建てられ町並は一新した。

(4) 大正時代の寒河江の町

大正時代に入って大きな町並の変化の要因は、大正10年（1921）の左沢線開通による寒河江駅の開業である。この駅は沼川を南に越えた高台の字幸田に設置され、西ノ町の中央、井田六右衛門の向かい側から駅まで、直線の取り付け道路を開削した。この通りには開通以前から運送業者、飲食店を始め様々の職種の店舗が進出して、寒河江の町でももっとも賑やかな町並を形成することになった。



大正期の寒河江の町並（左は西ノ町から南町を望む、右は六供町を望む）

(5) 昭和時代の寒河江町

昭和戦前期に入っても、町の骨格は変わらなかった。二つの大きな大戦を経て昭和戦後期になると新しい町づくりの動きが始まった。まず昭和23年（1948）元町に新制中学校が建設されると、学校周辺に人家が建ち始めた。昭和26年（1951）には、都市計画道路第1号として六供町に新設道路が開削された。八幡神社―寒高間である。さらに昭和29年

（1954）4月、都市計画道路・長崎～仲町線（仲町～保健所～新宿）が完成し幸町と命名された。昭和29年寒河江市誕生。最も大きな変化は、昭和35年（1960）駅前三叉路の開通工事が始まったことである。寒河江―仲町―新町―家浦―西根―寒河江川橋に連なる寒河江中央通りの開削のためであった。昭和50年にかけて、ここには市役所を中心として新しい町並が形成されることになった。昭和59年（1984）には元の寒河江城二の丸にあった西村山地方事務所等に移し、県道の天童大江線の南町道路が開通した。屈曲した城下町の通りを打ち抜いて直線道路を切ったのである。

(6) まとめ

寒河江の町並形成の端緒は寒河江城の構築であった。旧寒河江は五つの街道が交差する交通の要衝でもあった。近代に入って新道が開削され昭和30年ころの町並を形成したのであった。まだこの時代は、江戸時代から続く米遣いの経済が生きていて、人々の生活様式や年中行事も昔のまま続けられていた。それとともに石油コンロに代表される新しい生活文化も次々と入り、耕耘機による農作業の革新も進行しつつあった。人々は活気を帯び町並にもその躍動感が見えるようである。こうした時代の節目という観点からも昭和30年ころの町並図を記録して置きたい。

2、昭和30年ころの寒河江の町並の特徴

(1) 山形街道

南町には地方事務所・寒河江町役場・職業紹介所等の役所がある。ここから南方に進み満州床の所で東に折れ、中島屋の所で曲がり、新宿・石田を経て島・皿沼方面に続く。南町通りには商店街が見られる。通りには寒河江郵便局、安孫子医院、虎屋酒造が見られ、新宿阿弥陀堂がある。道場小路に寒河江映画劇場・本願寺、桜小路に高林寺がある。沼川橋端には宮川精米場、島崎への入口に橋本製材所、旅人を休ませた高砂もち屋、石田の山田だんご屋があった。

(2) 天童街道

山形街道と中島屋の所で分かれる。もとその向かいの三浦畳店の所に「右やまがた・左やまでら」という追分石があったが今はない。越井坂に続く通りには商店が並び、三吉だんご屋もあった。通りに小さな虚空蔵、少し入って大運寺と大きな虚空蔵堂がある。

(3) 谷地街道

この通りは三度ほど変わる。①城のあったころは矢ノ目―七日町―君田町―西根南、②明治期には矢ノ目―新道―石川―西根北、③現在は中央通りを寒河江川橋に進む。①は各家に古松が門前に植えられ、板塀の続く古い町並であった。七日町作業場、祐林寺、君田町法雲寺、大木山観音堂、現福寺、徳源寺、長松寺、十二小路薬師堂と続く。②は、七日町から寒河江川橋間での直線道。とくに新道には多くの商店が並び、東町商店街を形成した。国井医院、小林印刷所、西根村役場、月山鹿島両所宮、大沼医院、青年研修所、石川寺、光徳寺、北の薬師堂がある。矢ノ目に正善寺、徳蔵院。七日町に熊野神社がある。通りの中ほどにおかめ茶屋、北には土田茶屋があった。

(4) 内楯、上・下西小路周辺

もとの寒河江城郭内で落ちついた町並を形成。東内楯には亀山製麺、古沢酒造。中内楯には柿本牛乳屋、加藤八兵エ醤油、長念寺と最上三十三観音の第16番長岡観音を祭る。南の方に寒河江小学校、その構内に図書館、第一貨物もあった。寒河江小学校の前通りの下西小路も商店を始め種々の職種からなる町並を形成した。小学校の向かい側に営林署、のちの市教育委員会。上西小路はもとの寒河江城三の丸通りで、広谷耳鼻科を始め多く職人が軒を連ねた。

寒河江 西根 商店連合 中元大売出し

大福引付き

お買上500円毎に抽籤補助券進呈。補助券4枚で抽籤1等より4等まで空くじなし!!

景品の一部
清酒、醤油、砂糖、ビール、反物、洋傘、
Yシャツ、水炭、履物、サイター、磁詰、箱入タオル、
西瓜、ジュース、マッチ、等々
抽籤所 豊富に陳列してあります。

八月十五日より二十五日まで(五日間)

招請売出しはもう古い。皆へに当る自用品を山と積んでお待ち致します。

加盟店

(抽籤場所 駅前三叉路)

六所町	光がはきもの店	吉野屋分店
奥山製魚店	和田金物店	小林清三商店
宇井菓子店	宇井商店	新道地井坂
松田商店	松村菓子店	和泉屋呉服店
荒木幸次郎商店	池田茶舗	安孫子薬局
松田反毛工場	池田醤油店	田宮呉服店
藤澤はきもの店	日新商店	佐藤三吉商店
藤屋商店	三井商店	黒田野果店
小林金物店	三井商店	
大沼商店	駅前	
大沼魚店	高野口商店	西小路新道
宇井菓子店	高屋商店	瀧屋菓子店
横田魚店	松屋はきもの店	大沼小八魚店
阿部菓子店	天屋商店	石山眞空
島田魚店	武田時計店	國井桶店
水口屋商店	永月堂菓子店	最上屋商店
芳村	大貫薬房	多クハノ屋菓子店
山手商店	片桐はきもの店	奥山はきもの店
フチャ靴店	坂坂魚店	丸宮磁詰店
奥山はきもの店	石山電気商会	阿部安太郎商店
毎日屋食品店	飯田屋菓子店	瀬戸屋菓子店
上町横町	佐藤紙店	榮屋菓子店
小河屋茶舗	石塚金物店	
小倉屋本商店	細矢八百屋	
眞木薬局	日の出菓子店	
石山無線	玉野洋品店	
泉屋茶舗	多田御太郎商店	
佐藤菓子店	安藤商店	
大久保洋服店		
西ノ町	山吉野屋	
大久保商店	山森呉服店	
タカセトヤ	金屋	虎屋菓子店
山崎精肉店	佐藤薬堂	たから屋
新西屋菓子店	川島精肉店	西屋菓子店
江口魚店	中野食品店	小野はきもの店
寒河江製菓料	中野精肉店	小野魚店
竹屋商店	八百石商店	渡邊守治商店
アピコ靴店	里谷はきもの店	小野呉服店
渡辺呉服店	中島屋菓子店	寛永はきもの店

(5) 六十里越街道（西ノ町・六供町）

羽州街道の山形駅から寒河江を通り鶴岡に至る街道を六十里越街道または「湯殿山道」・「庄内道」・「大泉街道」とも称した。寒河江はその宿駅でその名残りが昭和30年ごろまで見られた。南町から西ノ町、上町、六供町へ続く通りは町の主要な通りで多くの商店や旅館が立ち並び中心市街地を形成した。寒河江税務署、福田屋、伊勢屋、電報電話局、警察署、両羽・殖産相互銀行、丸大スーパー、加登屋パチンコ、寒河江市立病院、八幡屋酒造、賀原屋旅館、正覚寺、奥山歯科（上町）、常盤屋旅館、奥山歯科（六供町）、法務局寒河江出張所・簡易裁判所、神宮寺があった。次郎長、だんご屋・吉兵衛茶屋も賑った。常林寺を過ぎ西寒河江駅を超えると左沢に至る。一方、八幡神社下から寒河江高校を過ぎ洲崎を越えると白岩に至る。

(6) 寒河江駅周辺

寒河江駅通りを仲町という。多くの商店・飲食店や会社が立ち並び活気ある町並であった。寒河江駅近くに後藤自動車、寒河江タクシー、齋院自動車、電業所、日本通運が置かれた。幸田町に入ると寒河江農協、寒河江保健所、日東食品が操業して産業交通の盛んな町並であった。木村仏壇から入った十日市場に南光院を祭る。この通りに福よし。伊勢屋から入って乗円寺の所で折れる細小路の通りには、米久、吉本旅館、富久住等が並ぶ。大カツラの所に熊野神社を祭る。賀原屋旅館から入った丑町通りには宿龍院。奥に入って本寿院、以速寺。通りの中ほどに寿福寺。沼川近くに滝田門観音堂と寺の多い通りである。この町にホテル伝内が源泉を持ち開業していた。

(7) 新町・横町・山岸・石持周辺

澄江寺の門前通りが新町である。昔のままの広い通りにゆったりとした町並がある。阿部材木屋、小松医院、牧野歯科、朝日木工があった。横町は法泉寺の門前通りである。関医院を始め多くの職種の町並が続く。二の堰に沿った山岸通りは東向きに家並みが続く。このころまで、長岡山楯の巨大な空濠を利用して氷室を作り、菅井・水戸部・井上の三軒の雪屋があった。山岸の毘沙門堂、龍泉寺があった。石持の通りには寒河江町長、同市長を長く努めた渡辺彦吉家を始め大きな農家が並ぶ。集落の端に観音堂がある。

(8) 八幡神社周辺

六供町の寒河江スポーツ角から入ると上小路を通り、澄江寺裏から山峡を上ると弁天様の所で長岡山と寒河江高校への分かれ道となる。この通りに西運寺、小笠原医院、専売公社寒河江出張所、中ほどの小路に入って寒河江女子専門学校がある。長岡山に林業指導所も設置され、寒河江八幡宮周辺とともに新しい町が生まれていた。

(9) 船橋・元町周辺

六供町の吉兵衛茶屋を下り、左沢線の舟橋踏切を越えると船橋である。ここには豊かな泉が湧いていて舟橋観音堂、船橋電化組合を中心に静かな町並が続いていた。元町は左沢線の姥石踏切を越えると佐藤繊維（ホームスパン）の石造りの工場があり、むつみ荘という温泉旅館があった。その周辺に商店や飲食店があった。寒河江中学校周辺の田園にも新しい集落が形成されつつあった。

3 寒河江のおもな祭り

(1) 寒河江仏教会の「花まつり」について

寒河江仏教会の花まつりは昭和の初めから始まりました。いやもっと早くからかも知れません。今もお釈迦様を乗せた行列の主役である白象は、寒河江商工会から寄付されたものであります。

戦争前は、寒河江小学校で稚児の化粧から衣装を整えて、人力車に乗って駅前の演芸館までの行列でありました。演芸館では寒河江小学校の生徒等による歌、おどりの学芸会が盛大に催されて、観客も会場一杯になりました。

戦後はその復興の為、特志者が数十回も集って協議を重ねました。より多くの稚児に出てもらいより多くの人たちに観てもらうため、西根の石川寺から出発して六供町の正覚寺に至る行列でした。長い距離なので稚児をリヤカーに乗せ、四面に紅白の幕を張り、造花の持花に稚児の氏名の札を下げ、長柄の日傘をさしての行列でした。当時は稚児の衣装も京都の業者からの借り物でした。その後世の中の景気も良くなり今では100着以上の衣装を持っています。世の変化も多く、リヤカーも次第に姿を消し内容の改善に迫られました。協議の結果もっと道中を短くする事も考えなければと、六供町正覚寺から新町の澄江寺まで徒歩で行列する事になり、それが現在に至っております。(約30分の行程)

正覚寺では出発前に稚児達の健全な生育を祈願して読経し、終点の澄江寺では誕生仏に甘茶をかけて合掌してお詣りします。最後にお釈迦様に今まで持って来た花を捧げて終わります。

その時は市長さん市商工会長さんをご臨席され、稚児に祝辞を述べて下さっています。

参加者の父兄の方々は、「これでこの子も健やかに成長し将来も良い人間として一生をおわりますよ」と云っておられます。

この花まつりは多くの市民に支えられ、市の最良の行事としてこれからも永遠に守り続けられていくことでしょう。



(2) 寒河江八幡宮の祭り

平安時代の寛治七年（1093）、京都の男山八幡宮を祭った八幡原八幡宮と鎌倉時代の建久二年（1191）鎌倉の鶴カ岡八幡宮の神霊を祭った六供町八幡宮の二つの八幡宮があったが、近世初頭に八幡原八幡宮を六供町八幡宮に合祀したのが現在の寒河江八幡宮である。

寒河江大江氏は鎌倉と同じような町づくりをした。寒河江城の西に八幡宮を祭り、馬場を設置して八月十五日の放生会（ほうじょうえ）には流鏝馬（やぶさめ）を行った。これが寒河江八幡宮の祭礼の原形である。江戸時代には神輿の町めぐりが行われた。六供町・上町・西町・南町・新町・七日町からは祇園囃子（ぎおんばやし）と山車が出され、内楯からは閏年に獅子踊が奉納された。明治時代になると神輿に武者行列がつき、奴振り（やつこふり）が導入された。第二次大戦後は仮装行列、近年は大江公武者行列が出て祭りを盛り上げた。

現在は九月十五日に神輿・奴の巡行、太々（だいたい）神楽（かぐら）・浦安の舞奉納があつて、馬場では三枚の的を射抜く古式流鏝馬が行われる。最大の神事は全国でただ一つの「作試し流鏝馬」である。一の馬、二の馬、三の馬の順位によって、早稲・中稲・晩稲の来年度の出来を占う農業との結びつきの濃いものである。「寒河江の馬走り」として知られる。

夜は18基の大きな地域神輿を始め、企業・学校・子ども会の神輿が4000人の担ぎ手によって町に繰り出され、東北最大の神輿祭りとなる。

八幡宮の境内には多くの出店が立ち並び、大勢の人出で秋の一日を楽しむ。もとは、この八幡宮の祭りが終わると稲刈りがはじまったのであつた。



(3) 山峡 巖嶋神社の祭り

寒河江に八幡宮の裏坂の所、寒河江高校に向かう通りと長岡山グラウンドに上る通りとの分岐点に弁天様、いわゆる巖嶋神社が祭られている。御神体は市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）。いわゆる金運と学問の神。寛文十二年（1672）ごろは今西三郎兵衛が社務を司り、明和九年（1765）に菅井弥五平に代わった。明治四年に社地を返上して弁天宮の小祠のみとなったが昭和二年に大きな石祠を祭り地域の人々が信仰して来た。昭和十七年ごろ溝延八幡宮の宮司菅井半五郎氏が、安芸（広島県）の宮島にある巖嶋神社から新たにご神体を勧請してきたという。これを山峡の山本正典家に託したが、山本家では熊野神社を奉斎しているとのことで、上町大沼長兵衛家で護持することになった。同家では祭りの日、現在五月第三日曜日にご神体を社殿に送迎する。

祭りの日、当番は幟を立て赤飯、御酒を用意し、寒河江八幡宮司のご祈祷の後、多くの信者が参拝する。そしてお札とお護符をいただく。その日は出店が出て屋台が掛けられ、歌や踊りで祭りを盛り上げた時期もあった。

もとは、地元の人たちが赤飯をもってお詣りに来る程度であったが、戦後、有志の人たちが、昭和四十五年（1970）社殿を造営し弁天の沼を改修して護持して来たが、近年は町内を三班にわけての当番制としたのであった。今日では八幡町・長岡町の町内で奉斎する神社になったのである。

ちなみに、社殿建立に親子二代で取り組んだ山本正典家は、もと市蔵坊と称する修験で熊野神社の別当を努めた旧家である。



(4) 常林寺の仁王尊の祭り

六供町の仁王様で知られる常林寺は、寒河江大江氏十八代高基の奥方「琴姫」が開いた寺院で、もと陵南中学校の所の「寺山」という所にあった。

この仁王尊は明治二年の神仏分離の時に八幡宮から払い下げられたもので、この股をくぐると子どもが丈夫に育つとかはしかが軽くなるなどと称して子ども連れの参拝客が多かった。



毎年十二月十四日、八幡宮の裸参りの帰途仁王尊に拝礼して甘酒をいただく風習があったが、昭和四十二年から交通安全と無病息災等を祈願して仁王尊に甘酒を捧げ、住職が金剛仁王経を奉誦する儀式の形態となった。

いわゆる仁王様の祭りである。今では十二月上旬の日曜日に行われ、多くの地域の人々が参詣に訪れる。儀式終了後、常林寺檀家の有志で準備した甘酒・おでん等を参拝客に振舞う。小雪の降る日も温かい日もあるが、この祭りが終わると本格的な冬がやってくる。

(5) 船橋地蔵尊の祭り 一付船橋共同作業場一

六供町の吉兵衛坂を下り、沼川にかかる舟橋橋を渡り左沢線の踏切りを越えると、船橋地蔵尊に突き当たる。ここで、道は落衣道と高瀬道の二手に分かれる。明治末期から発展した小集落は、今では船橋町という300を超える大集落に発展している。

集落の守護神である、船橋地蔵尊は、天正十二年六月山形の最上義光と戦って皿沼で落命した寒河江方の大将橋間勘十郎を祭るものであると「地蔵尊縁起」にある。この地蔵尊はあらゆる難病を治してくださるとのことで信仰が広まった。

地蔵堂内には中央に聖観音、右手に不動明王、左手に地蔵尊を祭る。毎月二十四日に月並み祭があり参拝者が多い。大祭は毎年四月二十四日。幟を立て本堂には祭りの幕を張り、近郷の信者が参拝に集ると、別当家では赤飯・昆布巻・こんにやく・じゃがいも・麩の煮付けなどを馳走する。地区民は草餅を搗いて食して、健康を守り、祝酒を酌み交す習慣がある。

地蔵尊の道向かいにある船橋地区の共同作業場は、戦後の地域の歴史を物語る。このころ、食糧事情が悪化し農業振興策の一環として農作業の電化が推進された。昭和二十五年組合員17名が出資して船橋共同作業場を建設。備えた機械は、籾摺機・製粉機・精米機・藁打機・脱穀機等で作業場に常設、二階を集会室にした立派なもの。当時寒河江町内の注目を集めたもので現存している。



(6) 正覚寺不動尊

正覚寺本堂の裏手西側が少し小高い岡になっており、そこには古いお不動様が祭っております。この不動尊は天正十二年頃に正覚寺開基当初から、約400年を超えて祀られているご本尊と思われます。恐らく開基以来のもので徳川幕府から不動堂領として16石余のご朱印地を頂戴した由緒ある不動尊であります。

不動明王はご存知のとおり、密教の根本尊である大日如来の化身とも言われ、如来の内証（内心の決意）を表したとして、大日大聖不動明王とも呼ばれておりますが、その起源は古代インド語で「動かない」「守護者」の意味と言われて、密教が中国より伝わった8世紀の半ばには「不動者」とし、大日如来の使者と位置づけられていたようです。

不動明王の「憤怒の相」は、外面は厳しくても内心は子を慈しむ親の姿の表現で、右手に降魔の三鈷剣（魔を退散させ人々の煩惱を断ち切る）、左手に羂索（けんじゃく＝悪を縛り、煩惱に喘ぐ人々を導く縄）を握り、背に迦楼羅焰（かるらえん＝三毒を食い尽くす伝説の火の鳥）の形の炎を背負い、火炎の中に立つことは「火生三昧」と言って衆生の煩惱を大智慧の火で焼き尽くし、悟りに導くとされているものです。

正覚寺の不動尊像は将にその御姿そのもので、近隣の方々をはじめ多くの信者の信仰を集め、現在も祭日の二十八日には参詣人が絶えないとのこと。この不動明王御本尊は丈49cmの天正年間の作と思われる木製の立像で、脇侍に古色蒼然とした制多迦童子（せいいたかどうじ）と、矜羯羅童子（こんがらどうじ）を侍らせ、背に激しく燃え盛る迦楼羅焰（惜しくも鳥の頭部が欠け落ちていた）の火炎の勢いは、少し腰を捻った動的な不動像の尊厳を一層引き立たせ、実に見事な御尊像と拝観いたしました。

また、堂内には正面に「神鏡」の外、信者が奉納したと思われる「宝剣」3本が供えられており、祠には「昭和四十二年六月 不動山正覚寺29世快応代」と記載され、寄進者「井田六右衛門内 はま」と記した「奉納幕」が架け巡らせてありました。更に堂内傍らには、享保六年八月二十八日＝不動尊の祭日＝に3名の寄進者が記載された、高さ30程程の木地のままの「空厨子」がおかれてありました。



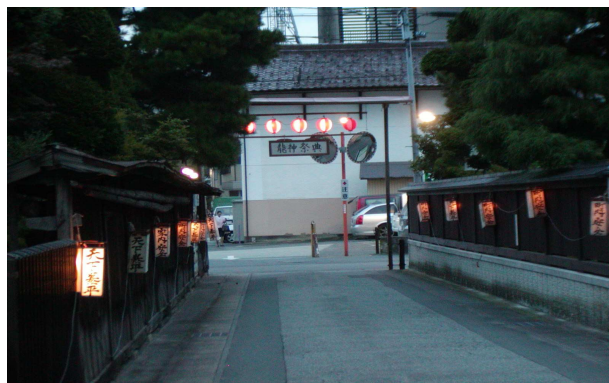
(7) 法泉寺の龍神堂祭り

大江家14代宗廣公を開基とする横町の古刹、法泉寺境内には龍神、弁天、稲荷の三社がある。そのうち龍神は、雨乞い、五穀豊穡、養蚕の神様として近世以前から地区民の篤い信仰を受けている。

龍神堂はご神体として古い鏡を祀るが、法泉寺には竜神に関連する寺宝、「龍天護法大善神」の掛軸がある。文明十五年法泉寺開山の際、本寺の山口県大寧寺からもたらされたという。この寺宝は竜神祭当日(九月三日)に、龍神護法殿に安置ご開帳される。昇り龍の図柄で、郷目右京進貞繁の染筆という口伝もあるが真偽は不明だという。法泉寺の本堂はしばしば火災に遭い、近時では慶応二年の寒河江大火に全焼。本堂の再建は大正二年という。寺宝のこの掛け軸も一時紛失したが、幸い岩手県で発見され、29世住職順法和尚が奉祀開帳した。

龍神堂は戦後まで続いた横町契約が護持したが、現在は横町町内会が交代の担当世話人を決めて毎年九月三日(旧暦、ただし現在は新暦)竜神供養祭を催している。往時には竜神の幟を立て、龍神堂前の二の堰(法泉寺川)の小橋から安孫子孫兵衛商店角までの参道両側には夜店が並び、横町の町屋には田楽提灯が各戸に掲げられ、華やかな祭礼だったが、現在は夜店もすたれ、祭礼当夜には古い田楽提灯だけが、もとの夜店通りの参道と横町通りの各戸に掲げられる。

田楽提灯に描かれた淡彩画は達磨画や川柳を賛した素朴な図柄が多い。縁日の夜店の面影やと幻想的なボンボリの画の風趣が、今でもわずかに残っているようで、懐かしい幼時の記憶を蘇らせる。法泉寺東堂(細谷順康)様の話では、南町の画人佐藤松観さんや駅前塗装店主片桐久満さんなどが染筆奉納したものだという事である。また法泉寺には古くから龍神にまつわる鏡池と泉水があり、寺号の「龍谷山法泉寺」もこれに因むという。



(8) 陽春院の延命地蔵尊（または勝軍地蔵尊）

寒河江城主15代大江孝広公を開基とする陽春院の境内には3坪ほどの地蔵堂があって、延命地蔵または勝軍地蔵と呼ばれる。この地蔵尊は行基菩薩の作という口伝があり、もと湯殿山の中興道智上人が奉持したものと伝えられる。現在の地蔵堂は幕末の文久三年に再建されたという。

柔和な表情にかかわらず、勝軍地蔵といわれる由縁には次のような言い伝えがある。

室町時代の天文年中に寒河江城主と左沢城主の間に争いがあったて対戦した時、一人の法師武者が現れ、戦場を駆け回って戦い、左沢軍を退却させる働きを示した。戦いのあとの法師武者は、とある草堂に入って姿を消したので、その堂中を探ったところ人影もなく、一体の地蔵尊が安置されており、不思議や全身が汗をかいたように濡れていた。寒河江城主はその働きによる勝利の功德を報謝し、勝軍地蔵としてこれを祀り、黒印地を給し篤く帰依したという。

もともと勝軍地蔵とは平安の初期、坂上田村麿將軍が東征のさい戦勝を祈った地蔵菩薩の名で、將軍は清水寺の建立に際し、本尊十一面観音の脇仏として地蔵菩薩と毘沙門天を祀り、地蔵菩薩を「勝軍」、毘沙門天を「勝敵」と名づけ、利益によって戦勝を得たという由緒がある。勝軍地蔵を將軍地蔵とする例もある。陽春院の勝軍地蔵も、この古例に基づいて当時祀られたものと思われる。

現在は延命地蔵尊として、西の町の商家を中心に地蔵講を作って護持し、祭礼は毎年七月二十四日の縁日に、家内安全、商売繁盛、身体堅固を祈願供養する。陽春院境内の入り口には提灯を飾った木造の山門をしつらえ参道には夜店が並ぶ。



行基菩薩の作といわれる地蔵尊



寒河江祭りの人出
(寒河江警察署前)

(9) 山岸 毘沙門堂の祭り

長岡山の東麓の段丘上、室町時代に構築された長岡山楯（城）の空濠のそばにある毘沙門堂。その本尊である毘沙門天像は、左沢の仏師林治郎兵衛の力作。優美な本尊として知られる。その右隣は伽藍神（がらんしん）、左隣は韋駄天（いだてん）。いずれも隣地にあった黄壁宗梅龍寺（おうかくしゅうばいりゅうじ）の遺品である。

出羽の黄壁宗の中心であったこの梅龍寺は安永六年（1777）に焼失し、山門は明治八年に焼失したが、この二体の仏像は地域の人たちが二度とも猛火の中から救い出して受け継いだのであった。

ほかに寒河江八十八カ所第十五番の弘法大師像を祭る。また、堂内には幕末から明治にかけての著名な画家小松雲涯（中山町小塩出身）の唐獅子の大衝立がある。明治二十二年（1896）本堂構築、昭和二十九年（1954）に拝殿等の改築を行った。

毘沙門天の初寅の日、今は二月の第二日曜日。下方に幟を2本立て、赤飯や御酒を上げて隣の龍泉寺の住職に祈祷してもらおう。お札を配布し、「福銭使い」と称して50円を上げて5円（御縁）をいただく。もと出店が立ち、市内はもちろん山形・山の辺・長崎・左沢・畑中・谷地・福島 of 信者もお詣りに来たという。家内安全・商売繁盛の神として知られた。

五月三日は上に2本の幟を立て、毘沙門天と古峯原の大祭を行う。龍泉寺住職が祈祷の後に参拝が行われる。この時「ツバキの葉」を頭に上げると、頭痛を防ぐということで無病息災もあわせて祈る。参拝者には紅白の餅をお護符として差し上げるほかに、月の三日と二十三日が毘沙門天の日。今は当番制で行う。三月の第一日曜日は村念仏の日。千願経を唱えて数珠を回す。

今では山岸共有会の19名が毘沙門天の信仰を高め、地域の人々の心の支えとして守り続ける。平成十九年十月、毘沙門堂拝殿が改築され、鳥居も新調されその荘厳さが一層増すことになった。



八幡神社周辺の景観 昭和30年ころ

(10) 石持の観音堂の祭り

石持から八畝に通ずる街道の中ほどに、千手観音を祭る観音堂がある。もと東昌庵。天和二年（1682）黄壁宗の高僧石門元通が、もとからの聖地にこの庵を建て出羽における黄壁宗拡大の拠点とした。元禄八年（1695）には地元信者の協力を得て学識にすぐれた法力をもつ無明和尚等が、石持龍泉寺わきに黄壁宗梅龍寺を建立したが、その後二度にわたって寺院焼失した。しかし諸仏像は地元の人々によって守られ、一部は石持観音堂、一部は山岸毘沙門堂に分けて祭られることになった。

明治四年には東昌庵（現観音堂）は二反八畝歩余。その後、観音堂に本尊千手観音像のほかには毘沙門像・達磨大師像・無明和尚像を祭る。ほかに寒河江八十八カ所第十六番の弘法大師像を祭る。

旧正月初寅の日は毘沙門天の縁日で、町内より5人ずつの当番が出て、遠くは朝日町・山辺町・市内高松方面からも参詣に来る人たちを接待して賑やかであった。毎月三日は毘沙門天の縁日・十七日は観音のご縁日。三日と十七日は町内の家押しで別当を務め、夜は村念仏を行った。五月三日は、無明浄明和尚の日。観音と毘沙門天の幟を立てて、地区あげてのお祭りとなった。八月十日の十カ所詣りには五名ずつの当番で参拝者を歓待していた。

つねに観音堂の境内は子どもたちの遊び場であった。



寒河江中心部の景観 昭和40年ころ

(11) 丑町宿龍院の閻魔堂十王像

丑町の宿龍院は市内の古刹、澄江寺の末寺で小宇多源兵衛政重(宿龍院勇岳清綸居士)を開基とする。小宇多氏はもと京都の人で下向の際、聖観世音菩薩を守護神として持参し、慶長初期に澄江寺の七世関室信鉄和尚が勧請して宿龍院を開創した。小宇多氏はのち太田氏を名乗り大江家に仕えて勘定奉行の要職をつとめた。

境内にある閻魔十王堂は宝永年間、後裔の大庄屋太田家が最上川船着場運上に関して幕吏と争い幕府に訴えた時、日頃帰依する宿龍院の閻魔石像に立願し、申し開きの結果勝訴し、家業の危機を免れたという。そのご利益を報謝して堂宇を寄進建立したという縁起が残る。



中央の閻魔大王の台座には正徳三年(1713)の銘があるので、280年以上も前のことになる。閻魔十王とは人の死後冥土で生前の罪業を裁く十人の王で、堂内には十仏事(死者の忌日供養)に応じて奪衣婆王をはじめとして秦広王(初七日忌)、初江王(二十七日忌)…とつづき、お終いの五道転輪王(三年忌)まで中央の閻魔大王を中心に左右に順に並び、閻魔大王を含めると合計十一体の石蔵が安置されている。閻魔信仰は平安末に起こり、鎌倉時代から盛んになったといわれるが、インドの地蔵信仰や中国の道教などが混雑したものだといふ。堂内の石像はもと彩色も施されていたらしく、色あせた古色が一層、異国的で怪奇な表情を引き立てている。

閻魔信仰の盛んだった昔は、地区の信者が講中をつくり交代で供養の祭礼も行われたが、現在は地区町内会が、奉賛を引き継ぎ、宿龍院の寺宝・聖観世音菩薩の供養と一緒に毎年八月十日に読経供養祭が催されている。



閻魔堂の内部

(12) 丑町滝田門観音と十カ所詣り

滝田門観音は通称丑町のお観音様という。本尊は秘仏の十一面観音である。正覚寺の隠居所といわれ、代官の松本さんと44名の講中衆で今日まで守ってきたのである。宝形造りのお堂は享保三年（約290前）の建立で、屋根は葺き替えられたが建家は当時のままである。

毎年旧二月一日は、講中衆による村念仏が行われる。毎月十七日の縁日には、開堂して参詣者を迎える。



滝田門観音

毎年八月十日の十カ所詣りは、本尊もご開帳され、早朝から参詣者で賑ったものである。丑町の各戸では軒先に手書きの絵と川柳の書かれた「田楽提灯」がつるされ、狭い通りの片側には多くの夜店が並んだ。市内各地に祭られている十カ所の中の、中心的な霊場として参詣者を迎え入れたのも、講中衆の信仰心と心意気があったからである。しかし、年々参詣者も少なくなり今では「田楽提灯」「夜店」も見られなくなった。

観音堂前の石の鳥居（明治四十五年寄進）は、駅前開発の道路拡幅で解体されたままである。

(13) 細小路熊野神社祭礼について

市指定の天然記念物「桂の古木」の元にある熊野秋葉両所神社は、通称細小路のオクマン様と称する。昔から講中衆が守り続け、今も毎年春旧四月三日（現在は五月三日）のぼり旗を立て神主を招聘し荘厳なまつりを行う。終って講中衆による直会が盛大に開かれる。昔は近隣からの参詣者で賑ったが、今は講中衆と限られた隣人だけの参詣者となった。

秋十一月三日には講中による細小路契約が長年続いてきたが、今は開かれていない。

しかし、毎月三日の女性による念仏は今も続いている。

尚神殿に保存されている細小路契約帳は、寛延二年（約260前）から連綿と講中で書き継いできた貴重な資料で寒河江町の歴史の解明に欠かせない。



細小路熊野神社

(14) 二十四町内会子どもみこしの起源と今

「駅前通り」が出来たのは、左沢線開通の大正十年である。駅前という立地に各地から人々が集り、かつての田園地帯はたちまち繁華街となった。

新開地は寄り合い所帯であったので、互いの融和と協力がなければ地域の発展は望めないと、昭和四年沼川から南、駅までの二十数戸が結束「駅前親睦会」を組織した。当時寒河江では、どこにも無かった町会の「みこし」を発想したのは、地区民の一致協力体制の確立と郷里の思い出づくり、そして何よりも守護神がなかったからである。

昭和六年から毎年、酒造店から酒樽を借り「樽みこし」を造り、町の鎮守八幡宮の祭典に、家内安全と町内の発展を祈願して渡御したのが「駅前子供みこし」の起源である。戦争によって一時中断したが、昭和三十年代中頃復活した。

思い出を高め、より確かな伝統にするため、借り物でない町会の財産を作りたいとして、昭和四十年本みこしを購入。天照皇大神宮、奈良春日大社、それに寒河江八幡宮の三柱をご祭神として、増々盛大に九月十五日早朝の渡御を続けて来た。しかし、駅前開発後住民の減少で、渡御は中止せざるを得ない現況である。

地域の先輩たちが、未来永劫を願った「二十四町内会子供みこし」は今、信用組合寒河江支店のフロアーに静かに展示されている。



昭和40年本みこしのお披露目

(15) 十日市場 お大日様の祭り

もと寒映前通りを南に下って突き当たる角に十日市場大日如来が祭られている。これは秘仏で江戸時代は南光院という修験が別当であった。元禄十年(1697年)の寄進札によると、胎蔵界大日如来の種子アを書き近隣の女性21名の名前が見える。弘化5五年(1848年)の前机建立には寒河江・西根の広い範囲の124名から寄進があり、信仰の広さを思わせる。

春の祭りは旧三月二十八日。地元十日市場を始め方々から参詣に来る。もとはご飯・汁・銘々盆のおかずのご馳走があった。女性主体の祭りである。十二月七日の大日堂のお年越は男性主体の祭り。旧二月一日の大日堂数珠回しは、三月の第二日曜になった。毎月十日の月念仏も欠かさず続ける。

古風な堂社の周辺は整備されたが、古い町の歴史と文化を表す貴重な祭りは今も続けられている。



十日市場 大日堂の昔

(16) 金比羅・姥石様の祭り

元町第一公園の東北角に「象頭山」という石塔と「姥石様」が鎮座している。「象頭山」は金比羅様のことである。この石塔には天保九年（1838）右あてら沢、左ひらしほとあり、もとは姥石のニノ堰橋のたもとに祭られていた。「姥石様」も古くからその地に祭られ、「姥石」の地名のもとになった神石で、明治期に西村山郡役所の庭石に用いられたりしたが、戦後むつみ荘の玄関前にもどっていたものである。

昭和五十年代、元町区画整理が完成し、第一公園が設置されるに及んで、当時市会議員であった佐藤善吉氏夫妻の提唱によって、二つの石像をお移しして元町の守護神とし、金比羅・姥石講（現在300名ほど）を結成して永く守り伝えることになったのであった。

祭りはもと五月十日であったが、現在毎年五月の第一曜日を金比羅・姥石様の祭りとし、午前六時から役員と元鳳会の方々、婦人部役員の手によって準備を行い、午前八時三十分寒河江八幡宮司の修抜奉斎があり、赤飯・御酒・こぶまきを参拝者にお護符としてふるまう。

近年、元町のみこしである「元鳳会みこし」を飾り、屋台を出して綿あめ・こんにゃく・ポップコーン・お好み焼きなどを参拝者にふるまう。

祭りの会場には紅白幕が飾られ、二つのご神体とみこしに大勢の町民が参拝をして交通安全と無病息災、そして地域の安泰と繁栄を祈る。元町は今では市内随一の都市環境をもつ町として発展している。



(17) 新宿阿弥陀堂の祭り

新宿の中ほど、道場小路へ入る角に阿弥陀堂がある。もと安孫子伝兵衛家と地蔵堂があったが、宝暦年間、故あって越井坂にあった常照院（廃寺）の阿弥陀三尊像をこの地蔵堂に祭った。明治以降は、これまであった地蔵講も阿弥陀講と名称を替えて祭りをを行う形態となった。したがって、この堂は阿弥陀・地蔵堂となるのだろう。

信仰厚い講中の人々は、一人ずつ交代して十五日間お繰番として毎朝両尊にお齋を供えて参詣する。十五日が釈迦の日となるから講中で数珠回しの大念仏を行う。その次の人は十六日朝からお勤めする。二十四日が地蔵の日であるから講中で大念仏を行う。もと七月二十四日が地蔵祭りで夜店も出て賑った。朝のお齋供えは今も続いている。

また五月八日（旧四月八日）の釈迦誕生会に講中で小堂屋根に花を飾り甘茶を注ぐ。八月十日の十カ所参りも大念仏を行い、参詣者を接待する。現在の講中は十一名である。



(18) 七日町市神祭

もと七日町で店を営んでいる家は七八軒あり、だんご屋・煎餅屋・煙草屋・桶屋・綿打屋・金物屋・その外瀬戸焼所もあったとのこと。賑やかな商店街だったという。月に三回、七のつく七日・十七日・二十七日に「おまつ」市がたち、北は西根の入口から東は阿部さんのところまで店が連なり町中から買い物客が大勢集って大変な賑わいであったという。「おまつ」に出店する人々は、柳の木の傍らの石（市神）に商売繁盛を願って、お燈明をつけお賽銭を上げお詣りしたそうです。それが市神様という。七日町の西に新道が開通してからは、めっきり人通りが少なくなって、商売が成り立たなくなり、商売をした家の一部は七日町から新道に出て行き。残った商家は農業に転職したようです。



後に昭和五十二年、御川の整備と都市下水道整備工事で、川のそばに立った商いの石市神様も単なる路傍の石と思われ取り除かれようとしたときに、由緒ある商いの石であったことに思いを馳せる人々があつまり、移転して後世に残すべきと判断し、七日町作業場の東側に移設したのです。

七日町の名残をとどめている市神祭は隣組の方々二戸ずつ廻り当番で、昔から市の日である十二月二十七日に行っていたのですが、勤め人の方がおりますので休日を利用して同月二十三日に変わり、市神様に注連縄をまき市神祭りをとり行います。

祭りには多くの人々がお詣りに来て下さいます。参拝者に手料理の外に紅白の餅をご馳走しています。又、五年に一回八幡様の宮司を迎えてしめやかに神事をも営みます。

日塔三郎さんが父から聞かされていた市神様の話をまとめてみました。

(19) 越井坂と虚空蔵様

天童街道より寒河江への入口に少し急な坂があって越井坂と言ひ、その上り口におかぐら屋・三吉と二軒の茶屋があり、旅の人達は一休みして寒河江に入ったとのこと。越井坂の由来は三つ程あり、東側一帯が崖のため「崖の腰」＝腰坂とする説。街道筋に冷たくうまい「釣瓶井戸」があり、その井戸を越すことで「越井坂」との言い伝えは、現に大連寺の境内に残る「こし井」と刻んだ小さな石塔からも頷けます。西行法師が腰を下して休んだとする伝説は、境内で俳諧を楽しんだ文人達が口伝にしたものと推測されます。

越井坂の上り口の奥手に虚空蔵堂があります。5代安孫子久右衛門・宗種が、「福一満虚空蔵菩薩」の信仰を深めたことから、享保13年7月22日の未の刻に虚空蔵菩薩が夢枕に立ち、「商売に精進せよ」との御告げに奮起し、直ちに「引き酒屋」を開業して繁盛。6年後の享保十九年（1734）その報恩感謝を込めて5間四方で3尺の回廊が付いた朱塗りの小さなお堂を建立、専称寺より「知恩山 大運寺」の寺号を戴きました。

建立当初よりご本尊がなく、檀家も5代目宗種以降の一族のみで、程なくご本尊は山形の江口弥五右衛門と言う人より「由緒ある虚空蔵菩薩の尊像を祀っているが、世俗間安置は畏れ多き次第故、貴殿建立の本堂の御本尊とされたい」との趣旨でお譲り戴き現在に至っております。例大祭は春三月十三日・夏六月十三日で、特に六月の大祭には初夏の夜祭として、街道から境内まで10数軒の出店が軒を連ね、深夜まで参拝の人並みが続き、寒河江夜祭の名物として当時の人々に親しまれ、八幡宮のお祭りに次ぐ賑わいとして語り継がれております。

また街道にある土蔵造りの「街道虚空蔵」は古老よりの伝承によると、虚空蔵菩薩は幸運を授ける仏とする信者が、奥の虚空蔵菩薩の分霊を祀り、日々拝礼したとされています。

大運寺境内は宝暦年間に廃寺となった「常照院」があったとする古い言い伝えがある外、安孫子家所有の土地を合わせ、崖地を崩して境内を作ったとされている。境内にある樹齢450年と推定される、市の文化財となっている見事な「アカマツ」や、樹齢350年と推定される「どうたんつつじ」より推測すると、宗教的施設があった跡地ではないかと考えられます。

更に境内には「六地藏」や商売の神様「宇賀神」が祀られ、毎年九月一日に八幡宮の宮司を迎えて、宇賀神講の皆さんによる祭礼が行われ、その外に東岡等俳人が残した句碑6基や、墓地の墓には辞世の句があって別名「俳句寺」と言われ、墓地中央には元文四年（1739）に宗種が建立の、台座を含め3mに及ぶ「五輪塔」が、歴代の先祖をお守りしております。



(20) 長念寺・長岡観音の祭り

内楯の中ほど、もとの寒河江城三の丸に真言宗長念寺があります。この寺院はすぐ近くに
あった惣持寺（柿本牛乳屋の所にあった。今は廃寺）の知事役（庶務）でした。

この寺院が別当を務める最上三十三観音・第十六番札所の長岡観音堂が境内に祭られています。
もと長岡山の頂にあり、幕府から七十二石のご朱印地を頂戴していました。春から秋にか
けて巡礼者が参詣に来るほかに霊験あらたかな観音様として大勢の方々がお詣りに来ます。

毎年四月十七日、七月十七日の二回、お祭りがあります。祭りの前日には隣組の人々が観音
の幟や提灯を取り付けます。観音堂では大勢の講中の方々が護摩祈祷に参加します。その日は、
寺の庭や道路に何軒もの露店が立ち並び、大勢の参拝客で賑っていました。

観音様の幟は、昭和二十七年四月に国井門三郎氏（八十二歳）の書で作られました。後に昭
和五十二年七月、長念寺の向かいに居られた阿部西喜夫氏によって復元されました。

また、観音堂内にはもと二の丸「お北」の松田家のところにあった「子宝地蔵」が祭られて
いて、子宝に恵まれるようにと参拝します。観音堂の通りにも、元下西小路にあった地蔵も祭
られています。ともに月の二十四日に地蔵講を開きます。

内楯には旭一流獅子踊が傳承されています。閏年の九月十五日の八幡神社祭礼の時に奉納さ
れています。この長念寺の庭で一カ月も前から練習しています。戦後は昭和三十三年九月の祭
礼の時に奉納しました。その当時やそれ以前に踊った人達が今も指導していて、この郷土芸能
を伝えています。



十二小路上空から中心街を望む 昭和30年ころ

(21) 七日町熊野神社の祭り

この神社は、紀州熊野（和歌山）三所権現の分霊を祭ったもので建久三年寒河江城主大江親廣が城の鬼門に建てられたものと伝えられ、明治四年まで御朱印高二十四石九斗をいただいた。当時の社地は広く杉の林を行くと社殿があり、その南に別当の建物があり鳥居もある神社であった。別当の竹本坊は神官となって竹内賀和見と名乗り別当坊を努めて神社の祭り等の世話をしていた。この人は明治六年のころ手習い所を開いて内楯・七日町・君田町等子供に手習いや読書を教えた。筆子の人たちは大正九年に感謝の心をこめて師匠の碑を建てた。

熊野神社と言えば七日町地区民はお熊ん様と呼ぶのが大方で、幸運と家内安全そして和の神様として地域を守って下さる尊い神社として親しまれてきた。お熊ん様は寒河江八幡宮と深い関わりを持った。戦争中は武運長久を祈願したものであり部落の方々に大きな力と勇気を与えてくれた。お熊ん様の祭礼は以前旧の三月十五日であったことから毎月旧の十五日には熊野神社の日として午後一時より近くに住む婦人の方々が集り般若心経を唱へお詣りするのが習慣でいまでも続いている。しかし、お祭りだけは四月三日で、氏子十六名を四班に分け当番制で行う。参拝者に手づくりの赤飯とおかずを早朝から準備し、紅白の餅をもご馳走する。当日氏子一同にて社殿を清掃、幟を立て、七時になると太鼓を打ちならし部落中をねり歩き祭りを盛り上げる。午前八時、八幡様の宮司を迎えてしめやかに神事を行う。以前は露店も二三軒立ち、年によっては、舞台も作られて大神楽が舞われ賑やかな祭りであった。今は舞台の代りに桜の木が枝を広げ桜花とその香りでお出向かえしてくれる。桜が満開になると部落の方は勿論のこと通りすがりの人も桜の花と香りに魅せられお詣りする光景もしばしば見られた。七日町に熊野神社が鎮座されていることを誇りに思い家内安全恒久平和を祈っている。

熊野神社の社内に古峯神社がある。古峯神社は火伏せの神様として祀られており、毎月十三日、講中で当番になった家に古峯様の掛け軸を下げ講中で参拝する習慣であったが、平成七年四月から熊野神社内に当番の人が古峯様の掛け軸を下げ参拝することとなり、お護符として煎餅二枚を参加者に配る。当日は掛け銭もあって掛銭の取まとめ役二人おり掛銭を元金として三年に一回、今は二年に一回栃木県の古峯神社参拝を実施する。火災から難を逃れることと、参加者は勿論のこと地域全体の息災を願い参拝をする。毎月十三日のお詣りは雨が降っても雪が降っても四十数名の全員は古峯神社を祭り末長く幸せになるようにと信仰している。



(22) 君田町と大木山 舟着観音堂

私は昭和四年 旧西村山郡西根村大字西根字君田町という村のなかに「町」という地名がある少々不可解な所に生を受けました。

室町時代の寒河江城主大江時茂の孫に君田孫九郎という人がいまして、この地を拝領し観音堂の近くに居を構え、村人と一緒に田畑を開き苦楽を共にした方がいました。村人はこの方を「君田殿」と呼んだことから この地名になったと言われています。

私の生家の東方小高い処に寒河江十カ所霊場の「舟着観音」があり農閑期になると十人も二十人ももの白い笈(おい)摺(ず)りを着たお行様が何組もお参りに来たものです。

大昔 最上川が「藻が湖」の時代は西根の舟着観音と東根の貴船川右岸の貴船神社は共に舟着の場所であり、東西の往来が盛んであったと言われています。

そして東根からの舟は、この舟着観音の高さ30米もある大櫓(けやき)を目標に航海し、そして大櫓には何時も沢山の小船が繋がれ、運ばれた荷物はここで荷揚げされたということです。

「舟着観音」の東側一帯の低地を「木の下」と言っていますが、戦時中の物資不足の時農家では この「木の下」から泥炭をとっていました。泥炭は田圃を3尺～4尺も掘り下げると葦の根の固まりのような層があるので、それを豆腐のように四角に切って天日乾燥させて燃料としたのですが火力はあまり無かったようです。 こんな泥炭の出土からも大昔はこの辺一帯は浅い湖であり、西根の舟着観音と、東根の貴船神社は共に舟着きの場で東西の往来が盛んであったということが頷(うなず)けます。

その後この大櫓は台風で倒れたが、荒木新次郎さん等九名の観音講中が君田孫九郎が他界すると元春の遺徳を偲び 倒れた櫓を用いて観音堂を建立すると共に樹木の一部を京都の仏師に「千手観音像」を彫ってもらい舟着観音の本尊としたのです。 また「大木山」の山号額は根本の木を用いたと言われています。

私達 小学校登校日の集合場所はこの小高い観音様境内でありました。また冬は、観音様の東側斜面は格好のスキー場であり日の暮れるまで遊んだものです。



(23) 村社鹿島月山両所神社

祭神 武甕槌命・月夜見の命

創立年代詳でない、天正年間寒河江四郎から鹿島明神社領十九石、月山権現社領二八石九斗四升黒印を以って寄進された。鹿島神社創立は石川の地であったが、後下河原に遷座し松本坊が別当であった。月山神社は下河原の千手院河原に置かれ、大江氏十代元高の建立であり千手院が別当であった。慶安二年十月十七日幕府は従来の社領を朱印に改め元の如く寄進された。明治十一年四月、二社合祀遷座して鹿島月山両所神社と稱した。鹿島神社は八鍬の鹿島神社の分社であると伝えられる。

明治七年二月村社に列せられた。杜人小松氏、鹿島神社領高三石を支配し、祭事を掌っていたが、年代詳らかでない。社僧松本坊鹿島明神社領高十九石を支配し、真言修験を以て奉仕してきたが、中頃月光院と改め、明治三年三月復飾して石川氏と稱した。

昭和三十年当時は四月十五日が例大祭であったが、現在は農作業のためか二十五日に行っている。男衆が早朝から新しい注連縄を作り、大きなのぼり旗を立て宮司による神事を行う。午後には懇親会で料理をいただきながら、お互いの絆を強めている。また西根南の婦人達による月山講が結成され、輪番制にして正月三が日と毎月十五日に念仏を唱えている。



(24) 新道について

昭和三十年頃、矢野目の交差点から北へおよそ600メートルの十二小路までを「新道」と呼び、商人職人達が軒を列ね大変な賑わいを見せていました。この場所だけですべて生活物資が賄えるといわれ、いつも近郷近在から人々の往来が活発でありました。新道の〇〇屋といえは名前を言わなくても町中に通じました。今でも屋号を使つての会話があたりまえのようです。

戦後十年ということで、いろんな面で人々が助け合わなければ生きられない厳しい時代でしたので、お互いの結びつきが強かったように思われます。当地には古くから「契約」がありましたが、戦争から帰還した若い衆が自分たちの集りがほしいと「新道親和会」を立ち上げて、六十年を迎えようとしています。（現在は東町親和会）

東町商店会青年部「秋祭り大売出しの仮装キャラバン隊」の写真がありましたので掲載します。当時東町商工会会長は武田精機の武田正次郎さんの時代。青年部の面々はアイデアマンが多く、自動車やバイクでキャラバン隊をくみ、南は高屋、東は蔵増・成生、北は谷地・溝延、西は幸生までと分担をきめ走り回ったようです。ちなみに四輪車を持っていたのが、釘工場の阿部三五郎さん（写真右端）三輪車がモノ屋の渡辺政則さんだけのようです。売り出し期間中は月山社境内で手作りの舞台を作り、のど自慢やおどりの盛りだくさんな賞品めあてに参加者が殺到し道路まで見物人があふれ、通行できないくらいだったようです。銀行からは新道は寒河江で一番金を集まるところだといわれていたそうです。

砂利道を学帽をかぶった寒高生が、マントをはおり、高下駄をはいて颯爽と砂埃を上げて歩く姿が懐かしく思い出されます。



東町商店会青年部キャラバン隊 鹿島月山両所神社境内

(25) 十二小路 薬師堂



十二小路 薬師堂の昔

十二小路の薬師如来は、元和元年 相州鎌倉より十二神将とともにこの地に勧請したといわれ、後年村内に悪疫流行して病苦に悩まされ、死者日々に続出したので、この上は神仏のご加護に俟つ外なしとして、村人一同、赤誠をこめて薬師如来に病氣平癒の祈願をしたところ、病氣忽ち消散し安堵せりと伝えられている。

明治四年 十二小路八日会が結成され、その後明治三十一年名称を十二小路契約と改められ、第二次大戦における新体制の中で八日講を薬師如来の縁日にちなみ、八日会と改称現在に至っている。八日会の行事として、大祭例四月八日、日待祭毎月の八日、十箇所参り八月十日、地蔵講十一月二十三日がある。

(26) 西根二渡観音

村山盆地が湖水だった頃、西の根岸「西根」東の根岸「東根」にそれぞれ祀ったのが、二渡観音（荷渡）で当時の舟人達から尊信され荷渡しの安全を祈願したのである。

西根の二渡観音は西根仲組大沼佐平治家を総代として仲組町内約40名で観音講中を組織、6班に分け、月十七日毎当番制にして念仏や参拝者の接待を行う。二月十七日の千願経、四月十七日のお祭り、八月十日十ヶ所参り、十一月のお供養念仏は特ににぎわう。

「木造十一面観音像」・「瀧姫縫字経」は、現在その末裔などの家に残る。

今からおよそ五百年前、室町時代の中頃寒河江城主大江宗広公の娘滝姫の伝説が残る。



二渡観音堂の昔

(27) 西根北町 薬師堂



北町 薬師堂

薬山修験の石川村常楽坊が前身。その後西根北の安達四兵衛家に伝承され、現在は北町町会45名を七班に分け2名ずつの輪番制にして、毎月八日のお参りには、お茶 漬物等を準備しお参りに来た方々を接待する。四月八日の大祭には契約当番がのぼり旗をたて、お護符(豆・煎餅) 漬物 煮物 赤飯を準備し一軒々ふれを出すので全戸がお参りに来る。(朝八時から昼まで)夜は廻り当番が担当し、大きな数珠をまわして夜更けまで心経をあげている。

(28) 山形県縦断駅伝競走大会

今年（平成十九年）で53回を迎えた、山形県縦断駅伝競争大会は、市町村合併が行われた年を記念して昭和三十年第一回県都市訪問縦断駅伝大会として開催された。

鳥海山の裾野遊佐町をスタートし、新庄・寒河江・長井・米沢・山形のゴールの305.6キロメートルを駆け抜ける県下の都市を訪問する画期的な大会であった。

第一回大会は七月一日～三日、真夏を思わせる暑い最中、しかも道路事情はどこの市町村も悪く、暑さとばん埃に悩まされブレーキするチームもでる大会となり、第2回目から五月に開催されるようになった。

寒河江・西村山チームはスタートから逃げ切る作戦が功を奏し、1回・2回・3回と3年連続優勝を果たし最初の優勝旗・カップは、完全に寒河江・西村山チーム手中のものとなった。その後年々選手も入れ替わり、思うように順位も伸びず、監督陣、選手一丸となって選手養成に力を注ぎ14年後第二期黄金時代（二年連続優勝）を築いたのである。

寒河江通過は二日目の昼頃、越井坂～南町（旧道）、元寒河江町役場・西村山地方事務所（現寒河江郵便局前の道路はなかった）元郡役所を通り、元寒河江警察署（現NTT）向かいの日新社前が中継所であった。勿論道路は狭かったが両側は溢れんばかりの人・人・人。屋根の上からも声援が飛び交い寒河江市の沿道はどこを通っても応援する市民の声が途切れず、他市町村に見られない情景であった。

年々変化する道路状況、町並みによって中継所も移動したが市民の駅伝に対する熱い応援は変わらず、今もつづいている。



第五回県都訪問駅伝寒河江・北村山の1、2位争い



三連覇優勝メンバー



第五回郡駅伝スタート



ゴール

協力者一覧（敬称略）

秋場大作 安孫子喜久子 安孫子繁夫 安孫子義雄 荒木康行 伊藤武夫 宇津井直一
大沼啓司 尾形良道 奥平曉戒 奥山峰一郎 小野忠英 小野博章 小野豊道 小野利雄
小畑米三 笠原登 熊木成夫 佐藤吉次郎 佐藤直正 佐藤文雄 志田元治 鈴木祥瑞
鈴木長司 鈴木芳吉 清野久子 高橋誠 土田五郎 長岡勇 中山秀子 日塔三郎 日塔武
芳賀トキエ 芳賀平太郎 布施忠 古沢健一 細谷憲孝 眞木恒雄 松本栄太郎
山田賢吉 山本キクノ 山本武良 山本正典 渡辺政男 渡辺政則 渡辺芳

執筆者

安孫子久右衛門 (6)(19)
安孫子忠雄 (17)
安孫子広好 (18)(21)
阿部麻夫 (7)(8)(11)
宇井 啓 (2)(3)(4)(9)(15)(16)外に1、2
大沼富太郎 (10)
小野豊道 (1)
細谷順康 (28)
布施光男 (22)
加藤好夫 (20)
佐藤重夫 (5)
渡辺照夫 (12)(13)(14)
渡辺広志 (23)(24)(25)(26)(27)

あとがき

町の記憶として昭和30年ころの町並を記録して後世に伝えたいという思いを安孫子久右衛門さんから再三にわたってお聞きしました。歳月の流れは早く、すっかりその顔を変えた寒河江の町並。安孫子さんの思いを生かしてぜひこれを記録して出版してみようと、有識者の皆さんにお願いして町並研究会が発足したのが昨年秋のことでした。

以来、五度にわたる会合を開きそれぞれの皆さんが足で歩いて調査しました。途中から町の記憶の代表的な寺社の祭りや昭和30年代の行事や建物にまでその範囲を広げたのでした。中央地区は昭和40年の最初のころの町並を住居表示の記録等から書き留めることにしました。

町は生き物のように動いています。そして絶えず変化し続けます。その当時の世帯主や屋号を書くことを基本としましたが相違しているところもあるかも知れません。お気付きの時は、どうぞご教示くださるようお願いいたします。

これまで私たちの調査活動にご協力いただきました多くの皆さんにお礼申し上げ、ご活用下さることを願っています。

最後になりましたがお世話になりました寒河江市立図書館・西村山地区視聴覚教育協議会・寒河江印刷所の皆さんに厚く御礼申し上げます。（宇）

町並研究会 委員

宇井 啓 佐藤重夫 加藤好夫 縄野幸男 渡辺照夫 渡辺広志
(六供町) (船橋) (内楯) (上町) (仲町) (新道)



安孫子広好 大沼富太郎 阿部麻夫 安孫子久右衛門 安孫子忠雄
(七日町) (石持) (新町) (道場小路) (新宿)

昭和30年ころの 寒河江町並図

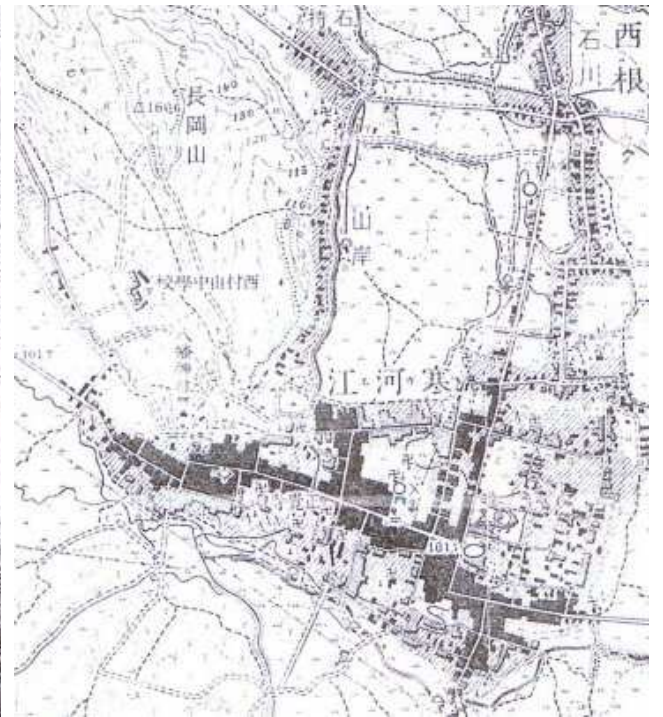
平成19年12月12日発行
編集・発行 寒河江町並研究会
代表 安孫子久右衛門
寒河江市南町2-2-5
TEL0237-84-2706



昭和31年中央地区の景観



昭和22年の寒河江町



明治36年の寒河江町